

ギッコンバツタン 戸倉ハル氏振付
エホンシヤウカ

準備 二人づつ組み、自由な位置又は圓周上に位置をさる。

ギッコンバツタン

二人向ひ合ひ、左足を一步前に出し、爪先で軽く床を四回たたくと同時に右手を斜下の前に出し軽く上下に足に合はせてふり乍ら人さし指で右足の爪先をゆびさす。

オモシロイ

前と同じ動作を左手、及び右足で行ふ。

アガツタトオモヘバ

一方の者は高く上にあがつた様子をする。踵をあけ背のびをし、両手は胸のまごころにあげ、拍手四回する、そして下にさがつてゐる者の方をみる。一方の

談話

第四週

者は下にさがる。力を入れてしやがみ両手は握つて體の側面の床の上につける。そして上になつてゐる者の方をみる。

マタスゲサガル

前と同じ動作を反對の者が行ふ、上になつてゐる者は下にさがり、下になつてゐる者は上にあがる。

サガツタトオモヘバ

やはり前と同じ動作を前ミ違つた方の者が行ふ。

マタスゲアガル

同じ動作を代つて行ふ。

ギッコンバツタンオモシロイ

二人両手に向ひ合つたまゝ、ミリスキップで一周りする。

「真黒なお馬の黒さんが、今夜もまたバカくバカく
さ廣いく野原を歩いて来たんですよ」

斯う云つて、黒のお客様の話を始めるに、私にはほんま
うに、月の夜道を黒が歩いてゐるその姿が見えてくる。話
を進めてゐる中に、だんくあたりの情景が、はつきりし
てくる。荒く伸びた夏草をふみく、黒は月あかりをたよ
りに、バカくバカく歩いてゐるに、俊雄さん、秀子
さん、犬や子猫や、鶏や栗鼠さいふわけで、お客さんは背
中にもう満員だ、それでも連れて行つて貰ひたいさねだつ
た白鼠や、鶉に相應の席を探して、互ひに譲り合つて、仲
よく野原をゆられてゆく。黒は黙々としてみんなを月の御
殿に連れて行かうさ歩いてゐる。ほんまに、今でも、何所
かで黒がかうして、みんなを喜ばせてゐるように思はれて
ならない。動くシルエット(影繪)をころろにうかべずには
ゐられないさいふのは、私ばかりではあるまい。

さて、子供にお話をしようさ用意する時、あまりお馴染
の材料ばかりで、——子供の方は年々變るので、いつも始
めて聴く話さして聴いてはくれるが、——さうかき云つて、

それに甘んじても居られないから、何かの童話集や新刊も
のをさがして見るに、なかくいゝ話は見つからないもの
だ。讀んだ時は左程に感じなかつたものが、實際に話を運
んでゐる中に無理が出たり、味氣ない話になつてしまつた
りするこもあつて、

あら、先生、それほんま？

さうしてそんなになるんでせう。

なま、他愛の無いと思はれる聴き手から、虚をつかれる
こも無いこも云へない、そんな場合、辻褄を合せて、さ
うにか始末をつけるにはつけても、内心の苦しいこも、ぢ
つさり汗の出るこもある。

そんな話に比べて、この黒のお客様の、何さ素直なよい
話であらう。話してゐるながら、黒さんの善良が先生にも子
供にも、滲みこんでゆくような氣さへしてくる。是と同じ
ようなよい話さいふのは、あきに出てくる「ねんくねむの
木」であらう。この二つは幼児向き童話の珠璧として並べ稱
されるものさ云ひたい。

猿さ玉葱 吟誦

一皮むいても 實^じが出ない

二皮むいても 實^じが出ない

何の木の実か 知らないが

むいてもむいても 出るものは

やつぱり同じ 皮ばかり

おかしな木の実も あるものこ

玉葱片手に お猿さん

小首かしげて 思ふよう

こんな厚着で るるからにや

よつほご寒い 北ぐにの

山のみやげか さもなけりや

さむがり育ちの 弱むしの

意氣地なしかも 知れないぞ

猿の滑稽味たつぷりな可愛いらしい動作が、玉葱を對象

として、たくみにうたはれてゐる。これは話の形になほし

てきかせても面白い。猿が玉葱を拾ふところから始つて、

最後に玉葱をつぶして涙をポロ／＼流すこゝ等敷衍して。

吟誦の仕方は前出。これをくり返してゐる中に、すつか

り覚え込んでしまふこゝ、猿の動作を真似て、皮をむいたり、不思議そうな顔をしたり、首をかしげて考へたりしながら吟誦するこゝもあつて、一つの遊びになるこゝもある。

明治十一年ごろの幼稚園の室内遊戯で、雨風の歌があつた。それを復誦しながら、椅子を動かして風の音をたて、両手を上から下に下ろして雨の降る様子をあらはし、そんな動作をしながら、遊んださいふ記録を讀んだ。

この玉葱の歌を誦みながら、めい／＼獨特の動作を考へ出すさいふようなこゝもあつて、雨の日の室内遊戯にも面白いであらう。

第五週

平三さんご權藏さん

二人の名の選び方がまことにいゝし、この二人が、虎のお腹の中で活躍するのは、まことに愉快な話である。但し、それが虎のお腹の中でさいふ場所の觀念をはつきりさせないこゝ、折角の話の面白さが生きて來ない。

「平三さんの話は面白い、こんな話を作つて貰ひたいものだね」こゝ、男のお子さんを幼稚園によこしていらつしやつた

某先生がおつしやつたことがあつて、よくわかつたお父さんだと思つたことがある。

第六週

運動會について

年々明治神宮外苑で、全校合併の大運動會が開かれる。

この季節にもなれば、お兄さんお姉さん方の學校でも運動會があつて、話を聞いたり、見にも行つたりしてゐる子が多い。その上練習々々で、今に自分達の運動會があることを豫想して楽しんでゐる。そこで、先生も共に待つころで、今迄の様子なごを話して聞かせ、その日を楽しみに待つようにする。

さうかするに、この時分迄遊戯をしない子がゐる時もある。つたりして、この運動會を好機に、苦もなくみんなと一緒になれたさいふ経験もある。今迄は、遊戯室で一人だけ別に居てもさし支えなかつたが、運動會ではさうはゆかない、仲間外れが、はつきり自分にわかる。みんなが旗を持つて樂隊に合せて行進したり、御褒美にゴム毬を頂いたりするのに誘はれて、仲間にはいつて見れば、らくらくさやつて

のけてゐるに云つたのは度々見受ける。先生もこの機を逸せず、面白く運動會の日の話をして聞かせ、當日は仲間外れにならないやう、楽しみを是非みんなと一緒に味はせたものである。

第七週

ねんくねむの木

今月はいゝお話がつゞく、いゝ話に云つても、この保育案に配列したのは、いろくの意味でよき話を選んだわけであるが、中でも、このねんくねむの木、黒のお客様、平三さん權藏さんはすぐれた童話であらう。

筆者が草花より多く木に咲く花を好ましく見るせいもあるが、合歡の木が葉もこまかく、花も細々してゐながらも、しつかりした幹に支えられてゐて、繊細な感じがしない。これは地に見る花では無く、空に見るからでもあらう。

この淡紅色の花に慕ひよつて来て、

ねんくねむの木 ねんねの木

ねんねにおいで ねにおいで

さいふ唄に誘はれてゆくものは、鬼でなくとも、小鳩だな

くきも、うつまりきして吸ひ込まれてしまふのも無理はない。

作者が、いたづら者の木つゝきに、こんないゝ唄を歌はせてゐるので、可愛いゝ動物の子供達をだましてゐながらも、却つて道化役者の一役をふりあてられてゐてにくめない。

お茶の水の舊い建物の頃であつたから、それからもう十四五年も経つたであらう。こんなこゝを思ひ出す。修了の日で、ぎの組の子も、みんなその日を幼稚園のお別れで、歸つて行つてしまつた。

常の日は違ふその日の静けさの中に憩んでゐた時、倉橋主事がいつていらつしやつて、かうおつしやつた。

観 察

第 四 週

すゝき

この月は年少組も年長組も植物材料が多い。花に、實に、

「あの室で、いゝお別れをしてますよ」

ミ。それは、その室では、「ねんくねむの木」のお話をし
てゐられたのであつたさいふこゝを、あきできいた。この
頃のように、修了の日にはいろくの催しがあつて、その
日にお話なきゝは思ひもよらないが、その頃の修了の日が、
いかにも、のんびりしてゐたさと思はれ、又ねんくねむ
の木を選ばれた保姆さんの人柄なきもさすがに思はれ
て、今でも時々忘れがたく思つてゐる。

なほ、これを書くに當つて、この作者を知り度いと思つ
て、心あたりを問ひ合せてゐるうちに、作者は平井泰太郎
氏ですきいふはがきを倉橋主事から、海岸の出先で受け
つた。

秋酣の今を表すものに植物が手近に多いから是非もない。

お月見頃よりかへつて今時分に澤山穂を出す。禾本科の
多年生草本、穂を尾花と言つて秋の七草の一つであるこゝ